

資格の学校
TAC

東京都 I 類 B [行政/一般方式] 採用試験
論文

【問題】

- (1) 別添の資料から、都が高度な防災都市を実現するために、あなたが重要であるとする課題を 200 字程度で簡潔に述べよ。
- (2) (1)で述べた課題に対して、都はどのような取組を進めるべきか、あなたの考えを述べよ。

なお、解答に当たっては、解答用紙に(1)、(2)を明記すること。

資料 1

首都直下型地震等による東京の被害想定

			東京湾北部地震（M7.3）	
人的被害	死者		約 9,700	人
		揺れ	約 5,600	人
		火災	約 4,100	人
	負傷者		約 147,600	人
		揺れ	約 129,900	人
		火災	約 17,700	人
物的被害	建物被害		約 304,300	棟
		揺れ	約 116,200	棟
		火災	約 188,100	棟
	避難者の発生（ピーク：1日後）		約 339 万	人

(設定の条件 : 冬の夕方 18 時・風速 8m/秒)

出典 : 平成 24 年 4 月 首都直下地震等による東京の被害想定報告書
(東京都防災会議) より抜粋

資料 2

災害時、人はどう動く？

(中略)

さらにアンケートなどにより、外出中どんな状況なら帰宅するかを尋ねる。そこから集められ、国や自治体の被害想定でよく使われるのが「距離と帰宅意志の法則」だ。外出先から自宅までの距離が10分未満なら、大半の人が頑張って徒歩で帰ろうとする。だが20分を超えると全員が帰宅を断念する。その中間は「距離が1分も延びる

く使われるのが「距離と帰宅意志の法則」だ。外出先から自宅までの距離が10分未満なら、大半の人が頑張って徒歩で帰ろうとする。だが20分を超えると全員が帰宅を断念する。その中間は「距離が1分も延びる

「距離・家族の安否が左右

「コトビーター」を駆使してこうした予測もできるものになってきた。国などが時間帯、平日・休日などの想定を示し、対策づくりを急ぐべきだと大佛教授は訴える。

が地震対策を考えるのに有効だ。崩れた建物や火災のなかを逃げるのは危険なため、職場などで待機するのが鉄則。何日間待機させ、食料などをどの程度備蓄しておくか。社員は性別や年齢構成から行動を予測すれば計画を立てやすくなる。2次災害の危険を洗い出す手立てにもなる。朝の通勤ラッシュ時に地震が起き、乗った電車が止まればどうするか。徒歩で職場などに向かうと、都心から逃げてくる人の流れに衝突し、押し潰れかねない。「コトビーター」を駆使してこうした予測もできるものになってきた。国などが時間帯、平日・休日などの想定を示し、対策づくりを急ぐべきだと大佛教授は訴える。

「コトビーター」を駆使してこうした予測もできるものになってきた。国などが時間帯、平日・休日などの想定を示し、対策づくりを急ぐべきだと大佛教授は訴える。

出典 : 平成24年 9 月30日 日本経済新聞朝刊より抜粋